「実験国家」ブータン教育調査の課題と概要

辻本雅史
京都大学教育学研究科

ブータン王国は、自然環境を保全し、固有の文化を保存することを優先課題に掲げた独自の近代化政策に取り組んでいる。そのために、世界的なグローバリゼーションの進行下、一定の閉鎖系様式を維持している。それは、産業化を中心としてきた従来型の近代化とは自覚的に一線を画した路線であり、現代世界でのひとつの国家的な「実験」と見ることができる。1997～99年、ブータン現地調査を行い、近代化の現状とその課題を、とりわけ教育の視点から探ってきた。ここでは、その調査の課題と視点、および調査の概要を報告する。

1 はじめに

グローバリゼーション（地球一体化）があらゆる国家、民族、地域を巻き込んで進行している。その方向は、少なくとも開発途上国においては、ほとんどつねに「近代化」という形をとって進んでいる。このグローバリゼーションの波は、世界各地域が本来もっている民族固有の多様な文化的な種差を薄めながら、急速に「近代」という均質なモノトーン的なものに世界を変えつつある。グローバリゼーションの過程とは、地球全体を「近代」の単色に染めていく動きとして進展している、といってもよい。

我々が調査対象としてきたブータン王国ももちろん例外ではない。ブータンが直面する「近代化」に関わる諸問題を、主に教育や文化の視点から調査し、それを現代におけるひとつの「実験国家」としてとらえてみたい。これが今回の我々の研究の基本的な立場である(1)。

2 ブータンを取り巻く国際環境と近代化政策

ブータンの近代化政策を考える上で、この国を取り巻く国際関係とそこで直面しているブータンの諸問題を避けることはできない。それは現代国際社会のなかでの、ブータンの近代化政策がもつ意味に関わってくるからである。

ブータンは人口60余万人の小国である(2)。もともとブータンはヒマラヤの北側から広がってきているチベット文化圏に属していた。いま、南に人口８億余りのインド、北に人口１２億を越える中国、西に2000万のネパールといった大国が、この国を取り囲んでいる。とくにネパール人は、ほぼ1世紀前から今のブータン領内に相当数移住して来た。そして現在、ネパール系ブータンは、南部を中心に総人口のほぼ3分の1を占めている。ネパール語はブータンの公用語の一つとなっている。1990年代に入るとネパール系住民との間で民族摩擦が起こり、難民問題でなお苦悩している（リングホーファー本報告書論文参照）。

ブータンを取り巻く上記の諸大国の前では、人口60余万人のブータンは、いわば芥子粒に等しい限りなく無に近い存在にすぎない（人口はインドの0．08％、中国の0．05％）。ひとたび国家運営を誤れば、まさに「大河の一滴」のように、周辺の大国の動きや流れのなかに呑み込まれて、たちまち国家自体の消滅を招きかねない。こうした国家としての存立に関わる危機意識は、単なる危惧ではなく、現実感をともなった深刻なものと考えるべきだろう。とくに1970年代半ばに消滅したシッキム王国の例が、それに現実感を与えていることを忘れるわけにはいかない。すなわちシッキム王国とは、かつてブータンの西隣に国境を接して存在していた小さなチベット仏教国である。その国情はブータンと大変よく似ていた。シッキム王国は、ネパール人をはじめとした外からの移民流入が続き、次第に多数派をしめるにいたった。やがておこった暴動をきっかけにして王制が廃され、1975年シッキム王国はインドに併合され、消滅する運命をたどったのである。（今枝1994参照）

ブータンの外交戦略や近代化政策は、このシッキム王国消滅の歴史を、陰に陽に念頭において取り組まれているといってよい。ブータンにとってシッキムの実例は他人事でない反面教師なのである。

ブータンは歴史的には、かつて近代の外国諸勢力の植民地支配下に入ったことはない。1950年代の中国のチベット侵攻とそれ以後のチベット併合や中国化進行のなかで、チベット・ブータン間の国境は閉鎖された。中印対立を背景にした超大国中国の脅威への備えである。他方で、インドを統治していたイギリス軍とはかつて交戦経験があり、軍事的に英軍に屈して条約を結び（1865）、それがそのまま第2次大戦後独立インド政府に継承された。中国との国境閉鎖以後、中国への対抗上、ブータンは（文化的には異質な）インドとの関係強化につとめてきたのである。

こうした厳しい国際関係のなかで、国家の生き残りを賭けた戦略を模索してきた。ブータンが鎖国を捨て、国際化の方向を選択していったのも、こうした外交戦略の一環であった。つまり1971年国連に加盟して、主権国家としての国際的認知を得、国際社会に参加するにいたった。国際社会のなかで主権国家として認知され、そうした世界システムのコントロール下で、国家としての存続の道を選択したのである。

それは、自己を取り巻く国際関係という「大状況」に対応した、小国ブータンの選択にほかならない。その意味では、ブータンの外交戦略とその一環としての近代化政策は、必ずしも純粋な内発的な選択とはいえない。それは第2次大戦以後、アジア国際社会の「近代化」（植民地を脱したアジアの、世界システムへの参入）が進行していく中で、ブータンだけが国際社会の外側で、中世的社会を維持しつつ自足的に生きていくことが困難になったことを意味している。

もとより第2次大戦後は、国民国家という近代の国家原理にもとづく世界システムが、アジア諸国にも浸透していった。こうした国際社会の世界システムに参加するということ、それは、国家的に「近代化」という方向をとることを意味している。つまり「近代化」という方向は、ブータン国内の内発的な意思によって選択された方向というより、外の「大状況」に規定された外発的なモメントに対応して選択された、国家的な方向だったのである。実は、それは非ヨーロッパ諸国のほとんどの近代化に共通する要素であったといってよい。古くは日本を含めて、少なくともアジア諸国のたいていの近代化がそうであった。こう考えてくれば、もともと外への移動をほとんど必要としていなかったブータンが、外の世界のシステム（近代の世界システム）に組み込まれたことと、ブータンが「近代化」政策をとったこととは、もとより一体のことであったといわねばならない。

3 「実験国家」ブータン

ブータンは1971年に国連に加盟して国際社会に登場してきた。それまで、長い間「鎖国」に近い状態を続け、ほとんど自足的な社会を維持していた。近代化という国家の基本的な方向づけは、たしかに第3代国王により1950年代にすでに開始されていた。しかし、その動きが本格化したのは、国際社会に参加した1970年代からのことである。以後これまで、8次におよぶ近代国家建設に向けた5ヶ年計画が進められてきた。その結果、今や首都ティンプーではコンピュータが普及し、インターネットの使用さえ珍しくなくなった時代に突入している。つまり一部は現代先進の都市世界と変わらない状況さえ呈しはじめているのである。

ティンプーの変化の速度はすさまじいものがある。たとえば1998年には、タクシーが都心部にあふれるようになった。ラッシュアワーには自家用車も含めて交通渋滞が毎日起こっている。また山小屋風のホテルの地階にジムやサウナを完備したヘルスクラブが営業開始し、キラやゴを着たブータン人青年男女の会員が利用していた。これらはいずれも95年には絶えて目にしなかった光景である。

しかしその一方、そのごく限られた都市の外側には、圧倒的広範囲に農村（山村）地帯が広がり、その大半は依然中世的な自足的生活を完全に脱しているわけではない。たとえば電力はインドに輸出されるブータンの最大の外貨獲得手段であるが、国内で電気が通じているのはまだ都市部とその周辺に限られている。ほとんどが山岳地帯からなる狭小な国土ながら、いわば中世から現代までの歴史的段階が同時に混在する国家、それがブー

タンなのである。

では、いかなる意味でブータンは「実験国家」であるというのか。

1 国民国家の創出：国際的にみればブータンはまぎれもない主権国家である[3]。しかし中世から現代までの社会が混在するブータン国内の現状は、国民国家という意味での近代国家の実質をそなえているとは必ずしも言い難いことを意味している。ということは、近代化をめざしているこの国の大きな国家的課題が、いかに「近代国民」を創出し、いかに「国民国家」を作っていくかという点にある、といってよい。言い換えれば、いかにブータン人が自らの国家的アイデンティティを確立し、国民各層にその内面化をはかるか、そうすることを通じて、いかに国民を国家のうちへ統合していくか、といった課題である。

2 近代化の特質：ブータンの近代化は、他の開発途上国と比べて独自の特質をもつ。すなわち他のほとんどの開発途上国は、先進国からの無制限の援助を受け入れ、それをもとにいわば「開発独裁」という統治形態によって、産業化を中心とした開発優先政策をとり、結果的に貧困層の増大と環境破壊を進めてきた（河合1994）。これに対してブータンは、外国からの国際援助に対しても、主体的かつ選択的態度をくずすことがない[4]。さらに顕著な特徴は、これまでほとんどすべての途上国がとってきたような、単純な経済主義にもとづいた産業化に進んでいるわけではない。むしろ自然環境の保全と固有の伝統的な文化保護に最大限配慮し、節度ある近代化と慎重に吟味した開発政策をとっている、ということである。環境の保全と固有の文化保存という課題は、ブータンの国家運営上における最大の優先政策となっているのである。現国王が若くして明言した「ブータンは、GNP（Gross National Product国民総生産）ではなくGNH（Gross National Happiness国民総幸福量）の増大をめざす」という有名な国家的スローガン（いわば国是）は、そうした基本姿勢を示した象徴的な言葉である。

3 こうした独自の近代化路線を可能にしているのが、国教としてのチベット仏教の伝統と、国王親政の政治体制であろう。ブータンは7世紀以来の長い歴史をもったチベット仏教国である。国家的に見れば、それは基本的に今も変わらない。（個人のレベルでは、ネパール系国民の増加などにより、かつてのようにチベット仏教一色とはいえない現実があるだろうが）。国民の大多数は敬虔な仏教徒であるように見える。彼らの人生の価値の中心は仏教信仰にある。仏教徒はほぼ例外なく自宅の最良の部屋を仏間に当て、日夜礼拝を欠かさない。政治制度の面では、ジェイ・ケンポ（大僧正）を頂点にした仏教界が、国政の中に一定の地位と発言力を制度的に保障され、国家運営に宗教的意思が自覚的に生かされるシステムとなっている。だから経済や効率の論理だけで、あるいは西洋的近代の原理や「合理的」価値観だけで、国政が運営されているわけではない。

また国王親政体制のもと、国家意思は国王によって明示される形態となっている。そして国王親政体制は、国民からのきわめてあつい国王への敬愛心に支えられている（杉本論文参照）。国民の国王敬愛心は、もちろんそのように誘導する政治や教育上の努力も大きな要因であるだろうが、しかしそれだけではなく、歴史や文化の伝統に根ざしているように思われる。ともかくこうした現状のもと、国王親政体制は、きわめて効率的に国家運営を機能させているかに見える。今や世界的にも珍しい国王親政体制は、しばしば誤解されるような国王専制体制では、決してないということは、注意されてよい。

4 以上をもとにブータンの国家的課題をまとめれば、第1に環境保全に最大限配慮した節度ある近代化、つまり産業開発至上主義と一線を画した近代化、第2に西洋的生活様式とは自覚的に一線を画し、民族的伝統と意識されるブータン独自の生活様式と文化を保存した近代化、第3に以上の前提の上で、独自な国民国家の創出、という点にあるといえよう。

こうしたブータンの国家的課題の遂行に、教育はいかなる役割が期待されているか。あるいはブータンの教育が、こうした課題と期待を背負って取り組まれているとすれば、そこにいかなる意味があるのか。そしてそこから、われわれが教育を考える上でいかなる示唆を得ることができるのか。我々のブータン教育調査の目的は、要するにこうした問題の解明にある。

けだし国民国家と民族、あるいは国家と文化の問題は、冷戦構造崩壊後のすぐれて現代的な問題

である。また生命の存続に関わる地球環境問題は、先進・途上の別を問わず、人類の生活すべてにつながった世界の切迫した問題である。さらに宗教教団や組織および宗教的精神が、政治にいかに関わるのかといった問題は、イスラム史やヨーロッパ中世史などをもちだすまでもなく、世界の歴史のなかでつねに主題をなす問題であった。とりわけ近代西洋の政治原理においては、政治は宗教からの中立性を基本に据えており、それが現代世界の主流をなす考え方となっている。こうしたなかで、ブータンで進められている国家的取り組みは、こうした現代の世界に普遍的な問題群を考えるために、格好の素材を提供してくれている。こうした問題群に対して、教育はいかなる意味をもちうるかと問うことは、教育を原理的に考える際に欠かせない視点となる。

われわれはこうした意味において、ブータンを「実験国家」としてとらえてみたい。それによってブータンを通して、現代世界を考えるための実にさまざまな問題が見えてくるはずである。

4　伝統文化の創出と国民国家の形成

（1）　ブータンの多様性

ブータンは、九州よりやや広い東部ヒマラヤ南斜面の小国であるが、民族も言語も文化も一様ではない。大きく言えば北からのチベット系と東南アジアや南方系、それに一番新しいネパール系の人々が国民を構成している。確かに文化的にはチベット仏教圏で、ほぼ全国に仏教が行きわたり、精神生活・社会生活を基礎づけている。しかし、一枚岩的な文化的一体性をもっているとも言い切れない。文化的にも、チベット、東南アジア、ネパールの要素をやはりもっている。さらにいえば谷ごとに文化の相違が認められる。民族的にも言語的にも、したがって生活習俗も、谷ごとにあるいは村ごとに、少しずつ異なっている。つまりヒマラヤ山岳地という地理的な要因のもと、谷を越えたつながりはあまり強くなく、それぞれが比較的自足的に生きてきた歴史が想定される。要するに、ブータンは狭小な国ながら、必ずしも一様ではなく、民族・言語・文化が複雑なモザイク状に織りなす、一種の多文化の国と言わねばならない[5]。

（2）　「近代国民」と伝統文化の創出

ブータンはこのように内部的に多様な要素を持つが、しかし近代化はその多様な差異を超えて、それを一つの国民国家として括っていくことを要求してくる。

また近代化は、ブータンにとっては、外の文化との接触や導入をも意味している。外部の近代の文化とは、近代が高度に達成した物質的な豊かさをともない、ハイ・テクノロジーに満ちた文化である。それが産業化をともない、経済主義に支えられているものである限り、不可避に人の欲望を刺激してやまない文化と一体なのである。思えば現在のグローバリゼーションを押し進める力が、実は経済主義にもとづき人の欲望を刺激してやまないこの近代の文化なのである。世界を一様化していく圧倒的な力は、この欲望喚起装置に発しているといってよい。

仏教信仰にもとづき、かなり自足的に生きてきたブータン人が、近代化政策の推進とともに、それまでとは全く異質で、圧倒的な欲望喚起力をもつ近代文化に接するようになってきたのである。外部からの近代の文化（異文化）が、それまでの「自己」と異質であればあるだけ、それに接触したときに、その反射として、「いったい、自己は何者であるのか」、という問いが同時的に発せられてくることを避けられない。それなくしては、現代世界にいとも容易に呑み込まれていってしまい、ブータンという「自己」は拡散し、たちまちのうちに消滅してしまうだろう。そうならないためには、「自己」を問いその自問に答える一定の文化装置が必要になってくる。つまり自問に答える文化装置を整備していくこと、これが実はブータンの近代化の過程と同時に必要な文化的課題に他ならない。それがまた、いわば「中世的」な自足のなかに生きてきたブータン人を、近代的国民に変換し、近代国民国家ブータンを創出することに、そのままつながることになる。現在進行しているブータンの近代化は、まさにそうした課題を遂行している過程に他ならない。

いままさにこの国は、自足的伝統社会から「離陸」して近代化に向かっている。かつてブータンの生活の価値の中心は仏教にあった。精神生活は仏教に支えられていた。ところが今、少なくとも都市部では、価値の中心は急速に「近代文化」に

移りつつあるかにみえる。そしてその重心の移動は、教育によって急速に加速している。教育は、社会を変えていく強力で有効な手段なのである。価値の中心が、伝統的仏教からいわばクローバルな「近代」への移動がおこりつつあるからこそ、ブータン固有の価値の「新たな創出」が求められているともいえる。それは、伝統的な価値と文化が、近代的な言葉とスタイルで語られ、定式化されている事態が進行していることを意味している。

ではそのためにいかなる文化政策の取り組みがなされているか、その詳細な展開や意味については、研究分担者の諸報告にゆずり、本稿ではその主な項目を以下に箇条書きで示しておきたい。

5 近代国民および国民文化創出の諸相

①［言語政策］ブータンの全国標準語、つまり「国語」としてゾンカ語を整備し、その普及をはかっている。そのための機関としてゾンカ語開発委員会センター（Dzongkha Development Commission）やシムトカ言語文化学院（Institute for Language and Cultural Studies）などが機能している。学校教育はそのための中心的役割を期待されている。学校教育のカリキュラムには国語（ゾンカ語）があるが、授業用語は現在では英語である。これをいずれゾンカに移行したいという方針をもっている。さらに書記文字の標準化、識字教育の推進、ゾンカ辞典の編纂、ゾンカ語タイプライターやワープロの作成などが取り組まれている（本報告書野村論文および杉本論文参照）。

②［伝統文化の整備］従来伝統文化とさえ意識されていなかったブータンの固有の文化を対象にして、その収集や整理、分類、伝承、教育などの文化事業を進めている。それはいわばブータン文化の「近代化」の作業であると見られる。つまり近代の眼でブータンの歴史的文化をはじめて対象化して、その意味を確定して国民文化として「再創出」する作業である。それは実際には、ブータンに伝わる多様な文化的諸相を、学問の対象として視野に組み入れたということを意味している。そのための中心機関としてシムトカ言語文化学院がある。同学院は、ブータン文化と言語を対象に研究する研究機関であるとともに、それをさらに再生産していく人材を養成する教育機関である。（そこでは伝統的な工芸や美術の技術を保存し、伝承していく作業も併せて取り組まれている）。とすれば、同学院は大学として立ち上がっていくことが当然期待される。現にそれを大学院もそなえた大学にする計画が具体化している。すぐ隣接するシムトカ・ゾンでの古くからの宗教教育（僧侶養成教育）とは異なり、英語も駆使した西洋式の学校教育形式がとられていた。

歴史を書く試みも進んでいる。かつてはインドの地理・歴史の教科書を使用していたが、徐々にブータン人の手になるブータン国民の地理と歴史の教科書が書かれてきている。その過程で神話や伝承の類の採集と整理も進められると聞いた。

なお首都に壮麗な国立図書館が建設され、チベット仏教（とくに仏典）関係のものを中心に収集と整理が行われている。

③［「国民服」（民族衣裳）着用の義務］ブータンは国民服として、男子はゴ、女子はキラと呼ばれる独特の民族服の日常的な着用がほぼ義務となっている。それはたとえば農作業の作業着としてまでも着用が義務づけられているほど徹底している。ジーパンやTシャツが、文化の差異を超えて、世界中を席巻している時代のなかで、ブータン人としてのアイデンティティを着衣にまで及ぼしているのである。ただしゴ・キラがブータン人の誰もが着用していた長い伝統をもったブータン固有の民族衣裳であるかどうか、疑わしいと思われる。もちろん一部でそれが着用されていた事実はあったであろうが、それが「ブータン人」固有の民族衣裳であると認識されるに至ったのは、さして古いことではないと推測される。私は近代化政策の過程のなかで次第に自覚的になってきたものと考えたい(6)。

④［ブータン建築様式の統一］ゾンや寺院だけでなく、民家まで統一した建築様式が守られている。政府によって決められた建築規制が忠実に遵守されている。木造の骨格、壁は、竹を編んだ下地に土壁を塗り、さらに白壁に仕上げる。木材には見えるところは鮮やかな彩色が施されている。屋根は原則としてこけら葺きで、その上に重石を載せて風に吹き飛ばされることを防止している。UNDPをはじめとした国連機関がオフィスを構えている大きな建物も、この建築様式が採用され、ひときわ見事な偉容を誇っている。ブータン建築

は、釘などの金具を使わず、また実に図面もないまま、大工職人によって建てられているそうである。このブータン建築は、森林などの緑の中に散在して、鮮やかなブータン特有の調和した風景を構成している。

⑤［国家的求心力の中心としての国王］国王親政体制で、国家的求心力の中心に国王がいる。現代世界で国王親政がなお行われている国は珍しい。先述のように、それは専制的独裁政治とはほど遠く、圧倒的多数の国民に敬愛されているように見える。国王は、国民の前にあらゆるチャンスを利用して親しく現れる。国営新聞クエンセルの第一面は、通常国王の写真と動向の記事で飾られているといってもよいほど、頻繁にメディアに「露出」している。また学校や役所などの公的な場所だけではなく、多くの家庭にもまた普通の商店などにも、国王の大きな肖像写真が、仏教界の法王（ジェイ・ケンポ）と並んで飾られている。国王の肖像写真は街角の商店で売られ、廉価で購入できる。国王への国民の敬愛心やロイヤリティの高さについては、杉本論文を参照されたい。

以上は、文化政策の主なものにすぎない。教育はいずれにも重要な役割を担うものとして期待されている。教育は社会を変え、また国民を一つに統合していく、もっとも有効な手段としてとらえられているといえよう。

ただ、こうした学校教育の担う課題は、要するに近代化政策の重要な一環であり、有効な方法であるという点である。近代的な学校教育の浸透は、近代化を軌道に乗せる一方で、価値観の変容と社会意識の転換をもたらしつつある。たとえば、かつては仏教が価値の中心に位置していた。したがって国民はもっとも優秀な子どもを早くに寺院に入れて僧侶を目指させた。それを誇りとしていた。しかし今や、多くの家庭ではもっともできの悪い子どもを寺院に入れて、できの良い子どもには学校教育を通じての近代的な「成功」に期待を寄せる現実が進行している。寺院に入れば、生涯の生活が国家によって保証されている。寺院で伝統的な僧侶教育を受ける若者の意欲と質の低下は避けられない状態である。その意味で今やブータンでの価値の中心は、仏教ではなく、「近代」（その象徴としての学校）に移行しつつある。

ブータンは、自然環境の保全と伝統的な固有文化の保存を優位においた、節度ある独自の近代化を目指していることを指摘してきた。その一方で、近代化はブータン国民生活の中で確実に価値の重心の移動を引き起こしつつある。グローバリゼーションの波に自覚的に一定の距離をとりつつ進められているブータンの近代化は、その独自性をどこまで貫くことができるのか。今後もこの「国家的実験」の可能性を見守り続ける必要がある。それこそこの地球の未来の運命を予知するうえでの貴重な示唆を示してくれるに違いないからである。

註

(1) ブータン王国を現代世界における一種の「実験国家」とみる見方は、米本昌平（1992ヒマラヤ学誌3）、河合明宣（1994ヒマラヤ学誌5）に示されている。

(2) ブータンには正確な人口統計がなく、時期によって諸説あるが、現在ではおおむね60万人の半ばといわれている。

(3) ブータンは、外交・軍事および経済の面では、南の大国インドになかば従属している。しかし国際社会のなかでは、もちろんひとつの主権国家である点に変わりはない。

(4) ただしブータンが受け容れている国際援助が小さいわけではない。ほぼ毎年、国家的歳入に匹敵する国際援助を受けている。

(5) ブータンの言語的な多様性と複雑さについては、本報告書野村亨論文参照。

(6) 1914年発行の“The National Geographic Magazine” 25-4 掲載の写真では、ブータン人の着衣は、現在のゴ、キラとほぼ同じに見える。ただ427頁に、「既に着用されなくなった」という古い形式の女性の着衣（貫頭衣形式）が写っている。ここでは、キラ以前に別の様式の着衣が存在した事実に注目したい。なお同誌該当記事は、J.C.ホワイト「空中楼閣—未知の国ブータンでの旅行と経験」月原敏博・古川彰共訳、『ヒマラヤ学誌』7（2000）に掲載。

引用文献・参考文献

今枝由郎『ブータン－変貌するヒマラヤの仏教王国』大東出版社、1994。

河合明宣「ブータンの地方制度と開発の課題」ヒマラヤ学誌5，1994。

河合明宣「ブータンにおける中央—地方関係」ヒマラヤ学誌6，1995。

栗田靖之「ブータンの文化的アイデンティティについて」ヒマラヤ学誌4，1992。

杉本均「ブータン王国における教育的発展と価値教育」アジア教育研究報告、創刊号、2000。

辻本雅史「フンザの教育事情と子どもたち」ヒマラヤ

学誌5，1994a。
辻本雅史「中国新疆省パミール山岳地帯のキルギス族の教育事情」ヒマラヤ学誌5,1994b。
辻本雅史「ヒマラヤ山岳地教育調査―フィールド教育学の試み」日本教育史往来、1999。
松沢哲郎・辻本雅史・池上哲司・成瀬哲生・出水明「ブータンにおける初等教育の素描：小学校とＮＡＰＥプログラム」ヒマラヤ学誌6，1995。
米本昌平『地球環境問題とは何か』岩波新書、1994。
他に、本報告書掲載の共同研究者の論文。

謝　辞

本研究は文部省科学研究費・基盤研究（Ｂ）（２）（国際学術）「グローバリゼーションに対する閉鎖系の教育様式：「実験国家」ブータンの場合」（研究代表者：辻本雅史、課題番号9041016）の助成を受けた。

【1997～99 京都大学ブータン・ネパール教育調査訪問地】

以下、調査の概要を示す。なおこの概要は、杉本均氏の記録と作成によっている。

[Ⅰ] 1997年度 第一次国際学術研究 京都大学ブータン教育調査97 訪問記録

1997年9月8日～9月21日　参加者：辻本雅史・前平泰志・杉本均（京都大学）野村亨（慶応義塾大学）月原敏博（大阪市立大学）[内 訪問先応対者・インタビュー対象者]

1997/9/8 <パロ Paro 地区>
パロ国立博物館(Ta Dzong/ National Museum)
[Lympoche Mynak Turku 館長]

1997/9/10 <ティンプー Thimphu 地区>
ブータン文部省 (Ministry of Education)
[Nima Wangdi 文部省教育部併任部長]
[Phub Rinchen 文部省教育部カリキュラム学術支援局副局長]
1997/9/10 国立図書館(National Library)
ゼルカ・アンニ・ダツァン尼寺(Zelukha Anni Dratsang)
伝統医学の病院
日本国際協力事業団(JICA/JOVC) [上田博幸氏]
国連開発計画(UNDP) [現地代表 弓削(内藤)昭子氏]

1997/9/12 <トンサ Tongsa 地区>
トンサ・ゾン (Tongsa Dzong) タ・ゾン(Ta Dzong)

1997/9/13<ブムタン Bumuthan 地区>
ジャカール高等学校 (Jakar High School) [Pema Dewa 校長]
ジャカール小学校 (Jakar Primary School)
[Sonem Gyemtsho 校長、Chandra Gazmer 図書館員、ゾンカ語教師他]
クジェ・ラカン(Kurje Lhakhang)寺院 ジャンペ・ラカン(Jampey Lhakhang)寺院
地域病院・シドゥラサン寺院(Seadrasang)

1997/9/14
タンシビ・コミュニティ・スクール (Tangsibi Community School) [Lham Dorji 教員]

1997/9/15 <プナカ Punakha 地区>
ミチュラカン(Myichu Lhakhang)寺院 プナカ・ゾン(Punakha Dzong)

1997/9/17 <ティンプー Thimphu 地区>
国立マッシュルームセンター

1997/9/18
文部省カリキュラム学術支援局 (CAPPS) 図書室 [Phub Rinchen 副課長]
モティタン・ユースセンター(Mothitan Youth Center) 文部省青年指導課 [Kinley Dorji センター長]
JICA コロンボ計画専門家 [茂木睦(Motegi Mutsumi)氏]
ゾンカ語開発センター (Dzongkha Development Commission/DDC) [Dorji Gyaltshen 所長]
クエンセル新聞社(KUENSEL) [Kinley Dorji 編集長、Tshering Wangdi 記者]

1997/9/19
シムトカ・ゾン(Simtokha Dzong)
シムトカ言語文化学院(Institute for Language & Cultural Studies)
[Singye Namgyel 校長]
キチュ・ラカン(Kyichu Lhakhang)寺院

1997/9/19 <パロ Paro 地区>
パロ・ゾン(Paro Dzong) 付属僧院(伝統教育授業)

[Ⅱ] 1998年度 第二次国際学術研究 京都大学ブータン・ネパール教育調査 訪問記録

1998年11月22日～12月2日　参加者：辻本雅

史・杉本均 (京都大学)
1998/11/24 <ティンプー Thimphu 地区>
ブータン文部省カリキュラム学術支援局(CAPPS) 訪問
[Phub Rinchen 課長]
1998/11/25 [Dorji Sangay 校長および視学官]
ジルカ中学校 (Zilukha Junior High School) (試験期間中)
シムトカ言語文化学院 (Simtokha Institute for Language & Cultural Studies) [Singye Namgyel 校長]
1998/11/26
ディチェン・フォダン (Dechen Phodrang) 僧院付属学校 [Lyonpo Kinley Gelchen 院長]
1998/11/27
ティンレガン小学校 (Tinlegang Primary School) [Doma 校長]
サンドペリラカン寺院 タシネンチャ伝統楽団 (Tashinancha)
1998/11/28 <パロ Paro>
パロ教員養成カレッジ (Teachers' Training College Paro) [Gopi Chhetri 副校長]
ドゥルックゲル・ゾン (Drukgyel Dzong:廃墟)
1999/11/29
タクツァン寺院 Taktshang Goenpa
<ネパール・カトマンズ Kathmandu>
1998/11/30
バクタプル旧市街(Bhaktapur) パシュパティナート寺院(Pasupatinath)
ボダナート仏教寺院(Boudhanath)
1998/12/1
ダクシンカリ寺院 (Dakshinkali) 生け贄儀式
トリブバン大学(国立)(Trivhuvan University) 図書館 [Chandra Kant Jha 図書館員]
スワヤンブナート寺院(Swayambhunath)
カトマンズ市内 ダルバール広場(Darbar Square)
クマリの館(Kumari Bahal)

1999 年 2 月 28 日～3 月 10 日
参加者：前平泰志・リングホーファー・辻本雅史
ワンディ・ポダン地域(Wongdue-Phodrung) ポッジ・ゲウォック村(Phobji-Gewog)
1999/3/3-4
カリキュラム・学術支援局(CAPSS) (Phub Rinchen) 局長
農林省山林課(Ministry of Agriculture, Forestry Service Division)
<ネパール王国>
1999/3/7
トリブバン大学(国立)(Trivhuvan University) 教育開発研究所(Center for Educational Innovation and Development) [所長会見、スモン教授]
1999/3/8
ブータン難民キャンプ (Bhutan Refugee Camp) [指導者と会見]
UNESCO ネパール事務所 [北村嘉彦氏]
カトマンズ識字学級

1998 年 10 月 26 日～12 月 14 日
参加者: 今井一郎（弘前大学）
ネパールの東北部農村フィールド調査

[III] 1999 年度 第三次国際学術研究 京都大学ブータン・ネパール教育調査 訪問記録
1999 年 10 月 30 日～11 月 10 日 参加者：前平泰志・杉本均 (京都大学)・ 野村亨 (慶応大学)・安井真奈美(天理大学)・月原敏博(大阪市立大学)・長岡智寿子(大阪大学院生)・吉田正純(京都大学院生)
1999/10/31<ネパール・カトマンズ Kathmandu>
ボダナート仏教寺院(Boudhanath) (Asantol) (Indrachowk)
カトマンズ市内 ダルバール広場(Darbar Square) 旧王宮(Hanuman Dhoka)
パタン(Patan)市内 チベット人難民キャンプ (Tibetan Refugee Camp)
1999/10/31<ゴファ Gofa 地区>
教育 NGO SOUP(Society for Urban Poor) 教室訪問 [Gujesholi Shresta 代表 Mala Blon 教員]
1999/11/1
教育開発研究所(Center for Educational Innovation and Development)
<ブータン・ティンプー Thimphu>
シムトカゾン(Simtokha) 付属僧院
シムトカ文化言語学院(Simtokha Institute for Language & Cultural Studies) [Cholten Tseri 副校長]
クエンセル新聞社(Kuensel)
モティタン青少年センター(Mothitan Youth

Centre) 成人学級見学 [Sonam ノンフォーマル教育担当]
1999/11/3
ゾンカ語開発センター(Dzongkha Development Commission/DDC) [Dorji Gyaltshen 所長]
国立図書館(National Library)
メモリアルチョルテン
シムトカ文化言語学院(ICLS)再訪
[Lungten Gyatso 校長 Gedun Pelzang 教員]
1999/11/4
ヤンチェンプー高等学校(Yangchenphu High School) (朝礼・授業) [Karma Yeshey 校長]
ジルカ中学校 (Zilukha Junior High School) (物理クラス) [Dorji Sangay 校長]
チャンガンカラカン寺院(Changankha Lhakhang)
シムトカ文化言語学院(ICLS) (野村)(ゾンカ文法・発音レコーディング)
1999/11/5
教育省カリキュラム学術支援局課図書館(CAPSS) [Phub Rinchen 局長]
1999/11/6 <パロ Paro 地区>
パロ教員養成センター(Teachers' Training College Paro) [Wangchuk Rabten 校長(Director)] キチュラカン寺院(Kichu Lhakhang)
1999/11/6-7
ランゴ小学校(Lango Primary School) 識字クラス [Rinzin 校長(長岡) ランゴ小学校識字クラス受講生]
1999/11/8
パロ・ゾン (Paro Dzong) 付属僧院 タ・ゾン Ta Dzong (国立博物館)(休館)
1999/11/8<ネパール・カトマンズ Kathmandu>
カトマンズ JICA [梶田美春専門員] ノンフォーマル教育専門家[Uttam P Upadhaya 氏]